令和４年度
第２号

広島市乳幼児教育保育支援センターだより

令和４年度第１回広島市幼稚園教諭・保育士新規採用者合同研修

今年度第１回の研修会を令和４年７月１３日（水）・２０日（水）に JMS アステールプラザで開催しました。（同じ内容で２日間開催。）「保育者としての私は、どのような姿勢で子どもと向き合えば良いのか？」と題し、広島大学大学院人間社会科学研究科　教授　中坪　史典　先生　に御講話いただいた後、４、５人のグループで講話のエピソードに沿って意見交流し、２日間で計２１７名の参加がありました。

【受講者のコメント】

〈講演で心に残ったこと、参考になったこと〉

- 子ども理解に基づいて活動や環境を考える大切さを学ぶことができた。
- 子どもがどのような経験を得られるのか、保育者はどの程度介入すべきかについて考えていきたい。
- 「子どもは未熟な存在ではなく、力強い存在である」という言葉が心に残った。
- 「リスクと利益」について考え、子どもにとってどのような利益になるのかを理解したやりとりを心がけたい。
- 最小限の介入にすることは、子どもが主体的に考えるために重要と感じた。

〈グループワークで、心に残ったことや参考になったこと〉

- 意見交流を通して、自分にはない考えに触れることができた。
- 保育で悩んでいることの解決につながるヒントをもらうことができた。
- 安全確保のための見守りは必要だが、監視になっていないかという意見もあり、「リスクと利益」を踏まえた対応について考える機会となった。
- 職員間の情報交換により子ども理解に繋がった他園の事例が参考になった。
- 紙飛行機討論を通して、他のグループが話し合った内容を知ることができ、また、違う視点で考えることができた。

講師による講話

グループワーク

紙飛行機討論

次回は２月上旬を予定しています。皆様の参加をお待ちしております。

乳幼児教育保育アドバイザーによる支援事例

「乳幼児の健康安全についての研修」（５月）

【支援内容】

広島市保育園園長会の園児の健康安全について考える研修でアドバイザーが、マスク着用が保育や子どもに与える影響について、「コホーティング（小集団に分けての活動）」等の最新情報を踏まえて講話を行いました。講演後のグループワークでは、今後マスクをしない生活が戻った際の保育者の対応や関わり等、参加者から出された意見について助言を行いました。

【主催者の感想】

マスクの着用のことだけでなく、今後の保育をどのようにしていくとよいかなどについて話し合うことができた。国の方針も出ているので、今後の方向性について考える機会となった。

【発行元】
「広島市乳幼児教育保育支援センター」
〒730-8586
広島市中区国泰寺町一丁目４番21号
広島市教育委員会事務局総務部教育企画課内
E-mail：nyuyouji@city.hiroshima.lg.jp
電話番号：（082）504-2833
Fax 番号：（０８２）504-2509

乳幼児教育保育アドバイザー派遣案内 2 次元コード

広島市 HP で「乳幼児教育保育支援センター」と検索してください。派遣についての御相談もお受けしていますので、お気軽に御電話ください。

外国にルーツを持つ子どもへの支援について

近年、幼稚園、保育園、認定こども園において、外国籍の子どもや海外から帰国した子ども、両親が国際結婚である子どもが増加しています。受入れに当たっての基本的な考え方や配慮事項について紹介します。

子どもと保護者の状況等の理解

受入れに当たっては、園全体で異文化に配慮した受入体制を作るため、来日の理由、来日前の就園状況、家庭での言語の使用状況や呼称などの子どもの状況を確認・把握するとともに、日本の文化等に触れることや日本語の習得といった保護者の要望を理解しておきましょう。

保護者への支援

伝達や準備物の確認の際には、実物や写真などの視覚資料を提示する、分かりやすい日本語表記や保護者の母国語に応じた簡単な資料にするなどしましょう。また、文化的背景などの違いから保護者には想像できないこともあるため、日頃から話しやすい雰囲気を作り、積極的にコミュニケーションを図りながら丁寧に内容を伝えるようにしましょう。

園生活における個別の支援

安心して園生活を送るために、子どもの心の動きを理解し、信頼関係を築くことや、日常的な生活や遊びを通した日本語に慣れるための支援など、一人一人に応じた支援を心掛けましょう。また、他の子どもとの関わりの中で、安心して自己発揮することができるよう、母国語で挨拶を交わす、身振り手振りを交えながら他の子どもと遊ぶ機会をもつなど、保育を工夫しましょう。

多文化共生の保育

他の子どもにとっても、異なる習慣や言葉に触れ、多様性に気付き、興味や関心を高めていくことは、互いを認め合い、支え合う関係を築く貴重な経験となります。異なる文化、生活習慣、言語を持つ人と一緒に活動する楽しさを味わえるようにする、日頃の遊びや行事等を通して多様な文化に触れるなどしてみましょう。

小学校への接続

園の生活で日本語での日常会話ができていても、実際には多様な意味合いのある言葉や抽象的な表現の理解等の獲得が十分でなく、就学後にサポートが必要となる場合があります。日常生活に必要な「生活言語」と、教科学習に必要な「学習言語」の習得状況を把握しておくことや、子どもの理解力に応じて段階的に日本語の語彙を増やす日常の関わりの工夫をしていきましょう。また、日本語理解の程度や園生活の様子について、連絡会や交流等の機会に小学校と情報共有もしておきましょう。

支援や保育の工夫は、保育者の姿勢が影響するため、園全体で計画的に取り組むことが重要です。

乳幼児教育保育アドバイザーからのメッセージ

「外国にルーツを持つ子どもへの支援」について多文化共生教育を専門とされる二宮　孝司先生にお話を伺いました。

昨年、広島市内の公立・私立の保育園長・認定こども園長を対象とした「外国にルーツを持つ子ども及びその保護者に対する支援に関する研修会」でお話をさせていただきました。コロナの影響で zoom による配信となりました。「研修参加レポート」の中で印象に残ったこととして、「多文化共生は自尊感情の育成とともに」「保護者が安心感を持てるように」「自治的な集団としてあたりまえに」など、園長先生方と共通の課題意識、そして支援のあり方について共有できたことを実感しました。

こうした現場の声は、幼稚園や小中学校からも多く聞かれます。小学校では、日本語指導拠点校が２校となり、日本語指導コーディネーターが配置されています。広島市の傾向として、以前は中区に多く在籍している「集住型」でしたが、１人でも在籍のある学校が 141 校中約 80 校に増え、「分散型」に変わりつつあります。また、国籍もベトナム、インド、ネパールなど東南アジアが増加しています。これに伴い、日本語指導コーディネーターの派遣依頼が増え、相談内容は日本語指導だけではなく、学級、学校の多文化共生教育のあり方や保護者、地域への働きかけ方に及んでいます。こうした分散化の傾向とそれに伴う多文化共生教育のニーズは、幼稚園や保育園、認定こども園でより顕著と言えるでしょう。そして各園では、子どもへの支援と同時に保護者への支援が今まで以上に求められています。

こうした変化に対応していくには、多文化共生社会における教育・保育のあり方について、園同士の交流や小学校への接続、行政や関係機関との連携を図ることで、子どもたちの「安心して」「ともに育つ」姿を同じ絵として描くことにつながると考えます。多文化共生が特別なことではなく、「あたりまえ」となる社会の実現を目指していきたいと思います。